

初公開

戦国時代、『出雲国風土記』を語り継ぐ ——「灰火山社記」の世界——

■謎の多い『出雲国風土記』の伝来

全国の風土記のなかでも完本として唯一残る『出雲国風土記』が、どのように伝えられてきたのかは、これまで大きな謎であった。松江城下の寺院の由緒として長らく伝えられてきた「灰火山社記」(松江歴史館所蔵)は、出雲国において戦国時代に『出雲国風土記』が利用されていた事を示す稀有な史料である。



灰火山社記 全景

『出雲国風土記』は、天平5年(733)に完成したがその原本は現存しない。鎌倉時代に京都の^{うらべかねふみ}ト部兼文・^{かねかた}兼方父子が原本又は写本を見る機会がわずかにあった。最古の写本は、慶長2年(1597)の奥書を持つ細川家本(永青文庫所蔵)で、これ以降、江戸時代を通じ国内に約150本余の写本が作成される。

江戸時代以前に『出雲国風土記』がどのように読まれ、継承されていったのかについては、圧倒的に史料が不足していた。この度、新たに

見出された

「灰火山社記」

の記述により、

原本または写本を見ることができた京都を遠く離れた『出雲国風土記』の舞台において、戦国時代の^{ぶんまき}文亀2年(1502)に出雲国内の社寺の由緒として『出雲国風土記』が語られていた事実が明らかになった。



灰火山社記 冒頭

■ 松江藩の祈願所・宝照院の由緒

「灰火山社記」は、松江市外中原町の灰火山^{はいかさん}を山号にもつ宝照院^{ほうしょういん}が所蔵していた。紙継の紺紙1m84cmの巻子で、金界を施し、894字の金字を刻む。戦国時代、奥出雲を支配した武士・馬来氏^{まき}が、領内に愛宕山^{あたごやま}の神を祀る祠堂を建てた時、奥出雲の地を訪れた大江氏の末流にあたる人物に祠堂の由緒の執筆を依頼した。大江氏の末流にあたる人物は、現地にあったいにしえのことを記した一通の願書と、古老の所伝を手掛かりに「灰火山社記」を著した。

その後祠堂は、馬来氏が毛利氏家臣として長門萩へ移住したため廃絶する。のちに由緒書は、月山富田城下の一乗院の由緒となったが、同院は江戸時代初め、堀尾氏の松江開府とともに松江へと移転し、宝照院と寺名を変えた。松江城下の宝照院は、風土記の時代にまで遡るこの由緒書をもとに藩の祈願所として明治維新を迎えることとなる。同院背後の山腹に鎮座する愛宕神社は、明治初めの神仏分離令以前、宝照院と一体化した神仏習合の状態にあったが、いまは外中原の阿羅波比神社^{あらかひ}の摂社となっている。

■ 何が書かれているのか？

「灰火山社記」の内容は、火の神・軻^か遇突智^{くつち いざなみ}が伊弉冉尊から生まれたとする出雲神話から説き起す。室町時代前期の馬来氏綱はこの地に愛宕山の神を祀ったが、この度、愛宕山の神の祠堂を新たに建てることとなったと経緯を説明する。この祠堂は、馬来氏が経営し領内の安全を祈祷するもので、東山に建てられた。古老の伝聞では、東山はかつて灰火山と



↑「灰火見風土記」(「灰火、[出雲国]風土記に見ゆ」)

呼んだ山で、作者は草木沙石に火を含んだ山であるから、そう呼ばれたのだろうとする。火の神・軻^か遇突智^{くつち}が生まれた地を阿具^{あぐ}と考えるのは、阿具^{あぐ}と軻^か遇^{くつち}の音が似ているからで、軻^か遇^{くつち}突智^{いざなみ}が生まれたと考える地にある阿具社と灰火山が同体であると知った氏綱が、灰火山とかつて呼ばれた東山にこの神を祀ったのだと作者は推定する。古い文献である『延喜式』神名帳(927年成立)に「阿具」、『出雲国風土記』に「灰火」の文字があることも傍証としている。

次に愛宕山の神の神威を説き、領土が安穏となる理由を説く。軻^か遇^{くつち}突智^{いざなみ}は雷神にも変化し、雷で家を焼くこともあれば、雨を降らし大地を潤すこともある。人が真心で国・民のために神を敬い祀れば、雨が降り、苗が生え、田を耕し、食料は十分に得られ、苦勞せずとも暮らしていけると説く。そして神を疎んじる行為は身を亡ぼす行為であり、罪の誅伐を祈れば叶い、皆服従する。領地を治める武士は、神を敬うことで自らの領土が無事に治まるのだと作者は説く。そして神への崇敬を行動に示したのが、古い考えに囚われないで祠堂を建てた馬来氏であり、愛宕の神を祀ったことで、その福を受けることができるのだと説く。つまり「灰火山社記」の作者は、神を敬う心が今の平安をもたらしていることを強調するのである。